

劔岳 点の記

—— 映画文学人生論

原作：新田次郎 (1965年)「新潮」
監督・撮影：木村大作 (2009年)
脚本：木村大作 菊池淳夫 宮村敏正
出演：芝崎芳太郎 浅野忠信 音楽：池辺晋一郎
宇治長次郎 香川照之 行者 夏八木勲
小島烏水 中村トオル 古田盛作 役所広司

雪を背負って登り、雪を背負って降りよ

道すじを見つけて、地図をつくる。なんでもないことのようにだが、世のため、人のために役立つ仕事だ。人間として生まれた以上、そんな仕事ができるばいいなと、新田次郎原作、木村大作監督の映画『劔岳 点の記』を観て、そう思った。

劔岳は名前の通り、けわしい山だ。地図があっても私には登れそうもないが、山の上まで撮影資材を持ち運んで、こんな映画をつくる人がいるのには驚く。木村大作はもともとカメラマンだが、この映画では監督になった。映画の完成はカメラマン出身の監督ならではの壮挙かもしれぬ。

日本の山は明治四十年までにはほとんど登頂されたが、未踏峰として残ったのが越中劔岳。弘法大師が草鞋三千足を使っても登れなかったという言い伝えがあり。立山曼荼羅では登ってはならないし、登ったら生きては帰れない地獄の針の山として描かれている。その劔岳への登頂と三角点設定をめぐるドラマ——点の記とは三角点標石埋定の年月日や人名などの記録である。

陸軍陸地測量部の芝崎芳太郎（浅野忠信）は越中劔岳を中心とした五万分の一の地図の最後のためとして三等三角点の完成を指示され、劔岳にも初登頂せよという内々の命令を受けた。

その頃、日本でも、山岳会が発足し、小島烏水（中村トオル）などが劔岳登頂を企画していた。陸軍としては山岳会に遅れをとっては威信にかか



剣岳 点の記

映画文学人生論

わる。芝崎芳太郎にも山岳会よりも先に初登頂に成功したいという功名心がないわけではない。

芝崎は宇治長次郎（香川照之）を山案内人として剣岳の下見に行くが、吹雪に見舞われ、玉殿の行者様と呼ばれる洞窟の修行者（夏八木勲）を連れて下山した。修行者は剣岳登頂の目的を聞き、「雪を負って登り、雪を背負って降りよ」という謎のような助言を芝崎に与えた。

それは剣岳の東面にある二つの大雪溪のうちのどちらかを登れという意味のようだ。芝崎たちは難行苦行の末、右の大雪溪（現在の長次郎谷）に登る道を選び、ついに登頂に成功した。

ところが、山頂に登ってみると、そこには赤錆びた長さ八寸ほどの大きさの剣の穂先と、手のひらいっぱいほどの大きさの錫杖（しゃくじょう）の頭があった。およそ千年前に修験道の行者が置いたものらしい。

結局、初登頂ではなかったため、芝崎の功績は陸軍測量部首脳から認められなかった。山頂には四等三角点を設定したが、点の記は三等三角点ままで、四等三角点についての公式記録はない。

しかし、芝崎たちの努力は地図をつくることで報われている。初登頂の記録などはどうでもよいことだが、山岳会の小島烏水からは「剣岳初登頂おめでとうございます」という祝電が届いた。

大雪溪登る行者の草鞋跡